

Nathaniel Hawthorne の人間観

—“*Young Goodman Brown*” を中心として—

川 口 洋 子

Nathaniel Hawthorne's concept of man as seen
in “*Young Goodman Brown*”

Kawaguchi Yoko

序

Nathaniel Hawthorne の小説に関して、R. W. B. Lewis が次のようなことを述べている。Hawthorne の小説には、村と森、都会と田舎の間を行ったり、来たりする主人公や女主人公が多く出てくる。彼等の多くは、倫理的な問題を抱えて迷っている人達である。自分が落ち込んだ世界を受け入れるか、それとも、その世界から逃げ出して別の道を歩むか、いずれかを決めなければならない人々である。¹

このような Hawthorne の小説の特徴は、“*Young Goodman Brown*” の主人公についてもみられる。主人公の Goodman Brown は、Faith という若い妻と二人で、Salem の村に住んでいるが、ある日の日没に村を出発し、森へ出かける。森で彼は、夢とも現実とも区別の付かないような、不思議な経験をする。彼は夜明けに、村へ帰っては来るが、森での経験が若い Goodman Brown を倫理的な問題に遭遇させ、彼を死に至るまで不信の世界へと導いてく。

Goodman Brown の森での経験と、村へ帰ってからの彼を描くことによって、作者、Hawthorne が、表明しようとしたことについて調べていきたい。

I

物語は、主人公の Goodman Brown が妻の Faith の制止も聞かずに、Salem の村を日没に出発して、森へ出かけるところから始まる。Hawthorne が、物語の舞台とした17世紀の

1 R. W. B. Lewis, *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century* (The Uni. of Chicago, 1955), p.113.

ニューイングランドの森には、Goodman Brown が物語の中で語っているように、インディアンと悪魔が住んでいた。“‘There may be a devilish Indian behind every tree,’ … ‘What if the devit himself should be at my very elbow!’”¹ 森には悪魔が住んでいるという Hawthorne の森の概念は、F. O. Matthiesen. によると Salem の魔女狩りで活躍した人物として有名な Cotton Mather の時代のものである。

The conception of the dark and evil-haunted wilderness came to him from the days of Cotton Mather, who held that ‘the New Englanders are a people of God settled in those which were once the devil’s territories.’²

当時、森に住む悪魔は、夜現われて、魂を売った人々を招いて怪しい集会を開くと考えられていた。従って、悪魔が現われる夜に、森へ出かけることは危険であった。

危険な夜に森へ出かけた Goodman Brown は不思議な経験をする。Hawthorne は、Goodman Brown の森での経験を通して、人間の心の中の悪について、彼の考えを示している。

森の入口で、Goodman Brown は、彼を待っていた悪魔と出会い、悪魔から、彼の祖先は、罪深い人々であり、彼がこれから出かけようとしている森の悪魔の集会にもよく出かけたことがあると教えられる。Goodman Brown は “We have been a race of honest men and good Christians, since the days of the martyre.”³ と信じ込んでいた。悪魔によって祖先の罪を知らされて、心に激しい動揺を覚える。

次に、Goodman Brown は Goody Cloyse 夫人に出会う。彼に取って彼女は、“… a very pious and exemplary dame, who had taught him his catechism, in youth, and was still his moral and spiritual adviser, jointly with the minister and Deacon Gookin.”⁴ であった。しかし、彼女は、信仰厚く、敬虔なピューリタンの夫人らしくなく、夜、森に来ているのである。その上、彼女の言動は、Goodman Brown がこれまで抱いていた彼女に対する概念を覆すものである。

さらに、Goodman Brown は、信頼していた村の牧師と教会の Gookin 執事の声までも耳にする。彼等は、“… there is a goodly young woman to be taken into communion.”⁵

1 Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown”, *Mosses from an Old Manse* (Ohio State Uni. Press, 1974), p. 75.

2 F. O. Matthiesen, *American Renaissance* (New York: Oxford Uni. Press, 1941), p. 282.

3 Hawthorne, *op. cit.*, p. 77.

4 *ibid.*, p. 78.

5 *ibid.*, p. 81.

と言いながら去って行く。彼等の会話は、村人を導いていく牧師と、教会の執事という立場に全くふさわしくないものである。Goodman Brown は、“Wither, then, could these holy men be journeying, so deep into the heathen wilderness?”¹ と、これまで信仰心の厚かった彼等に、ここで不信を抱く。

Goodman Brown の村の人々に対する不信を決定的にするのは、妻の Faith が付けていたピンクのリボンの出現である。ところで、当時の厳格なピューリタンの生活では、女の人には質素な服装を旨としていたから、このような時代にピンクのリボンを付けることは、派手以上のことであり、ピンクのリボンは罪の象徴とみられた。ピンクのリボンが森に現われたのは、妻の Faith も森に来ていることの証拠である。従ってピンクのリボンは、妻の Faith の罪を象徴していることになる。これまで Goodman Brown は、妻の Faith だけは“she’s a blessed angel on earth;”² と信じ込んでいた。しかし、“My Faith is gone!”³ と叫んでいるように、妻の Faith に対する信頼も失なわれる。この言葉は後で述べるように Goodman Brown が、Faith (信仰) も失うことを意味しているのであるが。

さて、Goodman Brown がとうとうやって来た森の集会には、Goody Cloyse 夫人や牧師や Gookin 執事や、村のピューリタンの人々が皆集まっていて、悪魔は、Goodman Brown と妻の Faith に悪魔の洗礼を行おうとする。しかし、Goodman Brown は必死の抵抗をして、やっと、悪魔の手から逃げることができる。

以上のような森での経験は、Goodman Brown に、妻の Faith をはじめとする人々は、すべて邪悪な心を持ち、罪人である、と教え、Goodman Brown の彼等に対する信頼を不信に変えた。

II

村の人々に不信を抱いた Goodman Brown であるが、Hawthorne は、Goodman Brown 自身にも邪悪な心があり、彼も罪人であるとしている。

Goodman Brown は、森で、悪魔の洗礼からは逃げることができた。しかし、森の入口で悪魔に会った時に、Goodman Brown が、“…‘having kept covenant by meeting thee here,’”⁴ と悪魔に言っているように、もともと悪魔と契約を結んで森へ出かけたのである。魔法の実存は、当時一般的に信じられており、魔法の罪は、まず悪魔と契約を結ぶことに始まると言われていた。このことから判断すると、明らかに、Goodman Brown の行為も罪である。

1 *ibid.*, p. 82.

2 *ibid.*, p. 75.

3 *ibid.*, p. 83.

4 *ibid.*, p. 76.

その上、森では Goodman Brown と悪魔は、“Still, they might have been taken for father and son.”¹ と述べられているように、息子と父のようであり、又、悪魔は Goodman Brown の祖父の姿をしている。“…, and in the very image of my old gossip, Goodman Brown, the grandfather of the silly fellow that now is.”² Goodman Brown は、悪魔の子であり、悪魔の子孫であるというこのことは、人間は、皆悪魔の子孫であるということになる。すなわち、皆罪人なのである。

人間は皆邪悪な心を持ち、悪魔の子孫であるというこの考え方は、人間の原罪を認めるカルヴィン主義的な考え方である。Hawthorne にこのようなピューリタンの悪の認識があることは、Herman Melville が、Hawthorne の *Mosses from an Old Manse* を評した時に指摘している。

Certain it is, however, that this great power of blackness in him derives its force from its appeals to that Calvinistic sense of Innate Depravity and Original Sin, from whose visitations, in some shape or other, no deeply thinking mind is always and wholly free.³

結局、Goodman Brown も、妻の Faith も、村の人々も、皆邪悪な心を持ち、罪人だったのである。

しかし、Goodman Brown は、森に来るまでは、妻の Faith は地上の天使であり、村の人々は皆信仰が厚く、敬虔なピューリタンであると信じていた。つまり、彼は、人間の心は善のみであると信じていたのである。ところが、森で彼が、悪魔にとり憑かれて、悪魔の世界に自ら入り込んで行こうとした時には、“There is no good on earth; and sin is but a name.”⁴ と言っている。又、悪魔は “Evil is the nature of mankind. Evil must be your only happiness.”⁵ と Goodman Brown に説く。森の悪魔はこの世に善などなく、人間の本性は邪悪であると言う。

Hawthorne は、人間の原罪を認めていたが、悪魔が言っているように、人間の心には、悪のみ存在するのでもなく、Goodman Brown が信じていたように善のみ存在するのでもないと考えていた。すなわち Hawthorne は、善も悪も人間の心には避け難く包含されていると考えていたのである。このことは、Hawthorne の “*The Intelligence Office*” の中で述べられている。

1 *loc. cit.*

2 *ibid.*, p. 79.

3 Herman Melville, “*Hawthorne and His Mosses*” *Representative Selections*, ed. Willard Thorp (New York: American Book 1938), p. 333.

4 Hawthorne, *op. cit.*, p. 83.

5 *ibid.*, p. 88.

There is more of good and more of evil in it; more redeeming points of the bad, and more errors of the virtuous; higher up-soarings, and baser degradation of the soul; in short, a more perplexing amalgamation of vice and virtue, than we witness in the outward world.¹

Ⅲ

Goodman Brown の悩みは、人間の善悪の二面性に直面したことから始まる。彼は、他の人の心の中にも、自分の心の中にもある悪の存在に気付かず、一方的に善の存在のみ信じていた。その信じていたことが、不確かになったため、何も信じることができなくなってしまったのである。

Goodman Brown は村へ帰った時に、村の人々が、森でのでき事とは全く無関係で今まで通りの、敬虔なピューリタンでいるのを見る。しかし、Goodman Brown は、ピューリタンを代表する Goody Cloyse や、牧師や、Gookin 執事が村では信仰厚いが、森では悪魔にとり憑かれていたのを見た。彼の目から見れば、このような二面を持った彼等に代表される村のピューリタンの人々は、皆偽善者である。結局、Goodman Brown は村の人々の信仰心に不信を抱いたのである。

ここに、Hawthorne が生活していた19世紀のゆがんだピューリタンの人々に対する彼の批判が表われている。当時のピューリタンに対する Hawthorne の批判は“Main Street”の中にも表われている。

—when the new settlement, between the forest-border and the sea, had become actually a little town,— its daily life must have trudged onward with hardly anything to diversify and enliven it, while also its rigidity could not fail to cause miserable distortions of the moral nature. Such a life was sinister to the intellect, and sinister to the heart; especially when one generation had bequeathed its religious gloom, and the counter-feit of its religious ardor, to the next; for these characteristics, as was inevitable, assumed the form both of hypocrisy and exaggeration, by being inherited from the example and percept of other human beings, and not from an original and spiritual source. The sons and grandchildren of the first settlers were a race of lower and narrower souls than their progenitors had been. The latter were stern, severe, intolerant, ...²

1 Nathaniel Hawthorne “*The Intelligene Office*”, *Mosses from an Old Manse* (Ohio State Uni Press, 1974), p.333.

2 Nathaniel Hawthorne, “*Main Street*”, *The Complete Works of Nathaniel Hawthorne, with Introductory Notes by George Parsons Lathrop*, Vol. Ⅲ (Boston and New York: Houghton, Nifflin and Company, 1889), pp.459—460.

Hawthorne は初期のピューリタンの精神に対しては肯定的である。しかし、それが受け継がれて、19世紀に致った時には、偽善と誇張が生まれ、19世紀のピューリタン達は、厳格で不寛容であると、Hawthorne は批判している。

ところで、Goodman Brown は、森での経験によって、妻の Faith の信仰心にも不信を抱き彼女に対する信頼を失ってしまったために、村に帰ってからの彼が彼女を見る目は冷たく、厳しい。

Often, awakening suddenly at midnight, he shrank from the bosom of Faith, and at morning or eventide, when the family knelt down at prayer, he scowled and muttered to himself, and gazed sternly at his wife, and turned away.¹

このことは、Goodman Brown は、結婚の契約に対しても不信を抱いたということになる。ピューリタンの契約的結婚観によると、結婚とは神を第一とし、神のもとにおける男女の共同事業である。² 妻の Faith の信仰心に不信を抱いた Goodman Brown が、神を第一とし、神への忠誠を強調するピューリタンの結婚の契約に不信を抱き、結局、ピューリタンの契約神学に不信を抱いたのである。ニューイングランドのピューリタン達は、自分達は、全人類の中から神の救いに選ばれた少数者であり、神の救いに対する応答として聖なる生活を義務付けられ、しかも、神はこの義務を実行する能力をも恵みとして与えられたと考えていたのである。³ 妻の Faith や村の人々の信仰に不信を持った Goodman Brown が契約神学に不信を抱いたのも当然の結果である。

IV

Goodman Brown が当時の信仰も結婚の契約も何もかも信じられなくなってしまって、“A stern, a sad, a darkly meditative, a distrustful, if not a desperate man, …”⁴ となってしまったのは、人間の善悪の二面性に直面した時に、人間の心の中の悪の存在を認めることができなかつたためである。

人間は善も悪も包含しているために、悪から起きる罪を経験する。罪を犯したという罪悪観によって、苦しみも経験し、その苦しみを通して人間は、一層精神的な成長をすることができ、さらに、一層の幸福も手に入れることができるのである。Hawthorne はこの幸福な墮落の思想を *The Marble Faun* の中で詳しく述べている。

1 Hawthorne, “*Young Goodman Brown*,” p. 89.

2 大下尚一『ピューリタニズムの形成と伝統』「講座・アメリカ文化 I ピューリタニズムとアメリカ」大下尚一編（南雲堂，1971），p. 11.

3 *ibid*, pp. 45—48.

4 Hawthorne, “*Young Goodman Brown*,” p. 89.

Sin has educated Donatello, and elevated him. Is sin, then, — which we deem such a dreadful blackness in the universe, — is it, like sorrow, merely an element of human education, through which we struggle to a higher and purer state than we could otherwise have attained? ¹

この幸福な墮落の思想は、第三章で述べたピューリタンの契約神学と矛盾する。人間は皆罪人であるから、神に選ばれた者のみ救われるのではなく、すべての者にも救われる可能性があるのである。

Goodman Brown の場合も、森の経験から、人間の心の悪を知り、人間の罪を認めることによって、苦しみを経験し、それを通して精神的に、一層成長することも可能であった。しかし、Goodman Brown は、森の経験を “it was a dream of evil omen” ² にしてしまったのである。

さて、Goodman Brown の死際が陰惨なもので、“…they carved no hopeful verse upon his tomb-stone; for his dying hour was gloom…” ³ であったことは注目に値する。彼がこのような最期を遂げたのは、Hawthorne の彼に対する批判の表われである。Goodman Brown は、自分の心の中にも悪が存在するにもかかわらず、人間は善でなければならないと決めつけて、人間の悪を認めようとしなかった。その結果、懐疑的になり、自ら孤独の世界を選んでしまった。これらのことに、Hawthorne の批判の目が向けられたのである。悪を認めない Goodman Brown の完全主義への Hawthorne の批判は、悪を認めようとしない、すなわち、罪悪感のない、19世紀のピューリタンへの批判でもある。

V

以上見てきたように、Hawthorne は、人間の原罪を認め、初期のピューリタン精神には、同意していたが、Goodman Brown が村のピューリタンの人々を、偽善者と批判したように、Hawthorne は、19世紀におけるピューリタンの人々に対して、批判の精神を持っていた。

Henry David Thoreau が *Walden* の中で、信仰があるということを安易に口に出したくないというようなことを語っているが、⁴ Hawthorne にもこのような気持があった。Hawthorne のこの19世紀のピューリタンの人々に対する批判精神は、彼を信仰と不信仰のジレンマへと導いていったのである。

Hawthorne は、*The English Notebooks* の中で、Melville の信仰について語っている。

1 Nathaniel Hawthorne, *The Marble Faun, The Complete Novels and Selected Tales of Nathaniel Hawthorne* (New York: The Moolern Lib., 1937), p. 854.

2 Hawthorne, “Young Goodman Brown”, p. 89.

3 *ibid.*, p. 90.

4 Henry David Thoreau, *Walden and Other Writings of Henry David Thoreau* (New York: The Modern Lib.), 1965, p. 82.

It is strange how he persists — and has persisted ever since I knew him, and probably long before — in wandering to-and-fro over these deserts, ...He can neither believe, nor be comfortable in his unbelief; and he is too honest and courageous not to try to do one or the other¹

信仰を持つことも、不信仰に落ち着くことも困難であるというこの文章は、そのまま Hawthorne 自身にも他の真面目な人々にもあてはまると、Randall Stewart は指摘している。すなわち、Goodman Brown の信仰と不信仰のジレンマは、Hawthorne のジレンマであったのだ。Hawthorne は、Goodman Brown を描くことによって、このように自己の人間観及び宗教観を表明したのである。

参 考 文 献

- Hawthorne, Nathaniel. "Young Goodman Brown", *Mosses from an Old Manse*, Ohio State Uni. Press, 1974.
- . "The Intelligence Office", *Mosses from an Old Manse*, Ohio State Uni. Press, 1974.
- . "Main Street", *The Complete Works of Nathaniel Hawthorne, with Introductory Notes by George Parsons Lathrop*, Vol. III. Boston and New York: Houghton, Niffin and Co., 1889.
- . "The Marble Faun", *The Complete Novels and Selected Tales of Nathaniel Hawthorne*, New York, The Modern Lib., 1937.
- Hoffman, Daniel. *Form and Fable in American Fiction*, New York, Oxford Uni. Press, 1970.
- 小山敏三郎『ホーソンの世界』萩書房, 1968.
- Lewis, R. W. B. *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century*, The Uni. of Chicago, 1955.
- Mattiesen, F. O. *American Renaissance*, New York: Oxford Uni. Press, 1941.
- Melville, Herman. "Hawthorne and His Mosses", *Representative Selections*, ed. Willara Thorp, New York: American Book, 1938.
- 大下尚一『ピューリタニズムの形成と伝統』「講座 アメリカの文化 I ピューリタニズムとアメリカ」大下尚一編 南雲堂, 1971.
- Stewart, Randall. "Melville and Hawthorne," *Moby Dick Centennial Essays*, eds. Tyrus Hillway and Luther S. Mansfield, Dallas, 1953.
- Thoreau, Henry David. *Walden and Other Writings of Henry David Thoreau*, New York: The Modern Lib., 1965.
- Waggoner, Hyatt H. *Hawthorne: A Critical Study*, Cambridge: The Belknap Press of Harvard Uni. Press, 1971.

1 Nathaniel Hawthorne, *The English Notebooks* quoted in Randall Stewart, "Melville and Hawthorne", *Moby Dick Centennial Essays*, eds. Tyrus Hillway and Luther S. Mansfield (Dallas, 1953), p.156.